千葉県八千代市

内野南遺跡a地点発掘調査報告書

2000.6

野村不動産株式会社
八千代市遺跡調査会

凡　　例

1．本書は，八千代市吉橋字内野1057－1・1057－2に所在する，内野南遺跡ａ地点の発掘調査報告書である。

2．調査は，野村不動産株式会社の宅地造成に先行するもので，その委託を受けた八千代市遺跡調査会が平成９・10年度発掘調査事業として実施した。

3．発掘調査は次のように実施した。

確認調査：期間　平成10年３月５日～平成10年３月17日　　面積　350㎡／5,300㎡

本調査　：期間　平成10年３月24日～平成10年４月16日　　面積　280㎡

4．整理作業は平成11年度事業として平成11年12月20日から平成12年３月31日までの期間に行い，報告書印刷は平成12年度事業として平成12年４月17日から６月30日までの期間に行った。

5．調査組織については巻末に掲載した。

6．本書の編集・執筆は，常松成人が行った。

7．土層の色調は，一部，小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』(13版 1993．1）を参考とした。

8．グリッド№・遺構№については，現地呼称をそのまま用いている。

9．遺物№については報告書における番号と注記の番号とが異なっているので，実物との照合がしやすいように，図の下に「289(本遺跡の番号)」で始まる注記№を付けた。

10．使用したスクリーントーンは，遺構においては火床と焼土を，遺物断面図においては胎土に繊維を含むことを表している。また遺物断面図の黒塗りは須恵器であることを表している。

11．出土した遺物・作成した実測図・写真等は八千代市教育委員会が保管している。

12．発掘調査から整理作業において，以下の機関・諸氏にご協力・ご指導やご教示をいただきました。記して感謝いたします。

野村不動産株式会社　　株式会社竹中土木　　千葉県教育庁文化課　　八千代市教育委員会

小笠原永隆　　田中　裕　　玉井　庸弘

本 文 目 次

凡例
第１章　調査の概要 …… 2
　1　調査に至る経緯 …… 2
　2　遺跡の立地と周辺の状況 …… 2
　3　調査の方法と経過 …… 4
第２章　調査の結果 …… 6
　1　調査区の層序 …… 6
　2　縄文時代の遺構 …… 6
　3　奈良時代の遺構 …… 12
　4　遺構外出土遺物 …… 12
第３章　まとめ …… 17
報告書抄録 …… 18

挿 図 目 次

第１図　内野南遺跡位置図（１） …… 3
第２図　内野南遺跡位置図（２） …… 3
第３図　内野南遺跡ａ地点周辺地形図 …… 5
第４図　内野南遺跡ａ地点遺構配置図 …… 5
第５図　A2-53-1G西壁土層断面図 …… 7
第６図　A1-95-4G西壁土層断面図 …… 7
第７図　A1-66-2G～67-1G東壁土層断面図 … 7
第８図　４Ｐ実測図 …… 8
第９図　４Ｐ火床３遺物出土状況 …… 8
第10図　縄文時代遺構実測図（１） …… 9
第11図　縄文時代遺構実測図（２） …… 11
第12図　縄文時代遺構内出土遺物 …… 11
第13図　１Ｄ平面図，遺物・炭化材出土状況 … 13
第14図　１Ｄ土層断面図 …… 13
第15図　１Ｄカマド断面図 …… 13
第16図　１Ｄ出土遺物 …… 13
第17図　出土土器・石器 …… 15
第18図　出土礫 …… 16

図 版 目 次

図版１　（１）航空写真　（２）調査前風景 南西から　（３）調査前風景 東から
　（４）A1-66-2G～67-1G東壁土層断面　（５）A1-95-4G西壁土層断面
図版２　（１）４Ｐ遺物出土状況　（２）４Ｐ完掘状況　（３）５Ｐ・６Ｐ・７Ｐ完掘状況
　（４）13Ｐ完掘状況　（５）８Ｐ完掘状況　（６）11Ｐ完掘状況
　（７）10Ｐ土層断面　（８）10Ｐ完掘状況
図版３　（１）１Ｐ完掘状況　（２）12Ｐ完掘状況　（３）２Ｐ完掘状況
　（４）３Ｐ完掘状況　（５）９Ｐ完掘状況　（６）８Ｐ～12Ｐ完掘状況
　（７）１Ｄ土層断面　（８）１Ｄ調査風景
図版４　（１）１Ｄ遺物出土状況　（２）１Ｄ完掘状況　（３）１Ｄカマド完掘状況
　（４）A2-5G遺物出土状況　（５）調査終了状況　（６）調査終了状況
図版５　（１）縄文時代遺構内出土遺物　（２）４Ｐ内出土遺物　（３）１Ｄ内出土遺物
　（４）遺構外出土土器
図版６　（１）石器　（２）大礫　（３）小礫

第１章　調査の概要

１　調査に至る経緯

開発事業者野村不動産株式会社（以下「事業者」と略）は，八千代市吉橋字内野1057－1・1057－2・1083－2・1083－3に所在する面積9,568.49㎡の土地について，集合住宅・戸建住宅などを建設するための宅地造成を行う計画をたて，平成９年12月４日，埋蔵文化財の有無とその取り扱いについての照会を，八千代市教育委員会（以下「市教委」と略）と千葉県教育委員会（以下「県教委」と略）あてに提出した。これを受け市教委の生涯学習部社会教育課（現在の生涯学習課）が現地踏査を行った。その結果，①周知の遺跡の範囲外である。②しかし南向きの台地縁辺部であり，部分的に旧地形が残っている。③現況は山林であるため地表面の観察ができない，という理由から試掘を実施して埋蔵文化財の有無を判断することにし，同年12月16日試掘を行った。テストピット５か所56.3㎡を掘り，うち２か所から縄文時代前期の土器片・石器・遺構などを検出した。このため，より詳しい調査が必要と判断し，同年12月25日付で，照会地のうち埋め立てられた谷部を除く5,300㎡について，遺跡有りの回答をした。新発見の遺跡なので，№289内野南遺跡と命名した（第３図）。

事業計画は変更できずしかも急を要するため，事業者は同日付で文化財保護法第57条の２第１項の規定による土木工事の発掘届を，文化庁長官あてに提出した。事業者と市教委との間で発掘調査実施に向けての協議が行われ，調査費用は事業者が負担することで合意した。この合意に基づき平成10年２月２日，事業者・市教委・八千代市遺跡調査会（以下「調査会」と略）の三者は埋蔵文化財に関する協定を締結した。これの規定により，調査会は発掘調査を実施する組織を編成し，文化財保護法第57条第１項の規定による発掘届を，同日付で文化庁長官あてに提出した。また事業者・調査会は同日付で発掘事業の委託契約を締結した。

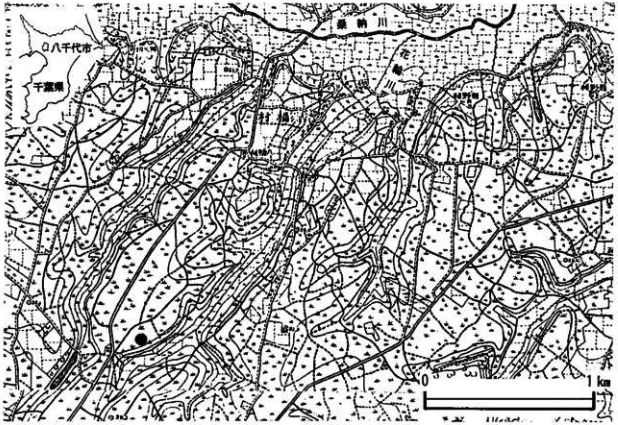
調査会は，同年３月５日から３月17日まで確認調査を実施した。対象地5,300㎡のうち，土取り等で地形が改変された部分を除く範囲にトレンチを，350㎡分設定し掘削した。その結果，遺構として奈良時代住居跡１軒・縄文時代炉穴２基・同時代土坑５基を，遺物として縄文時代早・前期土器，石器を検出した。

この結果を受け市教委は同年３月20日，県教委の指導のもと280㎡を本調査範囲として事業者に通知した。引き続き本調査を実施することで合意し，調査会は本調査を同年３月24日から開始し同年４月16日に終了した（第４図）。

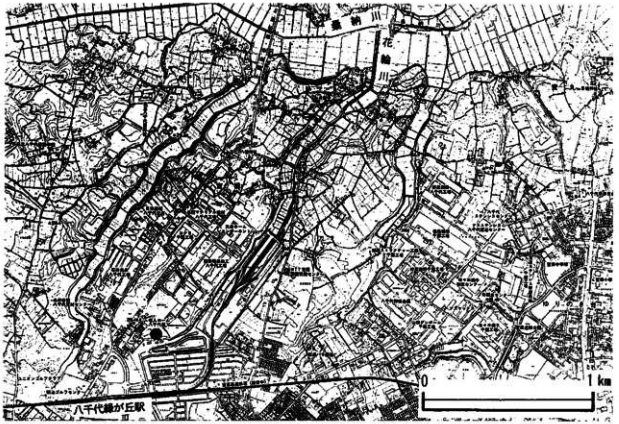
２　遺跡の立地と周辺の状況

八千代市域を流れる新川（旧平戸川）の支流桑納（かんのう）川の低地からは，南西に延びる谷が発達している。その谷の一つである花輪谷津の奥部の北側台地上に，内野南遺跡は存在する（第１図）。市域の西部に当たり，花輪谷津の谷口から約２km，東葉高速鉄道八千代緑が丘駅の北東約500mで，標高は27～24mの台地の縁である（第２図）。

本遺跡は周辺が吉橋工業団地として既に開発されていたことや，山林であったことのため，その存在がわからなかった。前述したように，今回の照会を機会に試掘を行った結果，遺構・遺物が検出され，遺跡として登録することになった。遺跡の広がりは，北～北西に隣接する未開発の山林に及ぶものと想像される。また谷に沿った北東方向では，隣接地は既に削平されているが，約200m離れた荒れ地は本遺跡のｂ地点として，平成10年８～９月に確認本調査が実施された。縄文時代の落とし穴状土坑１基，少量の焼土を伴う土坑１基，早期井草式・中期加曽利Ｅ式・後期加曽利Ｂ式の土器片が検出された（八千



第１図　内野南遺跡位置図（1）　明治15年迅速測図に加筆



第２図　内野南遺跡位置図（2）　八千代市都市計画基本図 1：10000に加筆

代市教育委員会1999)。

本遺跡の南側一帯は，西八千代東部土地区画整理事業地であり，また東葉高速鉄道の本線及び車庫が存在する。これらの事業や建設に先行する発掘調査が行われ，報告書が作成されており（財団法人千葉県文化財センター1989・1994，八千代市西八千代遺跡群調査会1996)，比較的広範囲に渡って遺跡状況が明らかになっている。谷を隔てた南の台地上には，仲ノ台遺跡があり，旧石器時代・縄文時代・平安時代の遺構・遺物が検出された。特に縄文時代は，前期黒浜式の遺物と住居跡が確認され，内野南遺跡との関連が想定できる。また谷を隔てた北東の台地上には大和田新田芝山遺跡があり，ここでも旧石器時代・縄文時代・平安時代の遺構・遺物が検出された。縄文時代は，前・中・後期の住居跡のほか，落とし穴状上坑や炉穴，早期から後期に至る遺物等が確認されている。内野南遺跡の縄文時代要素をほとんど含んでおり，強い関連性を感じさせる。

参考文献

財団法人千葉県文化財センター(1989)『八千代市仲ノ台遺跡・芝山遺跡』－東葉高速鉄道引込み線および車庫用地内埋蔵文化財調査報告書－

財団法人千葉県文化財センター(1994)『八千代市沖塚遺跡・上の台遺跡他』－東葉高速鉄道埋蔵文化財調査報告書－（仲ノ台遺跡・ヲイノ作遺跡・向山遺跡・上の台遺跡・黒沢台遺跡・沖塚遺跡・台北側遺跡）

八千代市西八千代遺跡群調査会(1996)『千葉県八千代市仲ノ台遺跡・ヲイノ作遺跡他発掘調査報告書』－西八千代東部土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査－

八千代市教育委員会(1999)『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成10年度』

3　調査の方法と経過

（1）確認調査

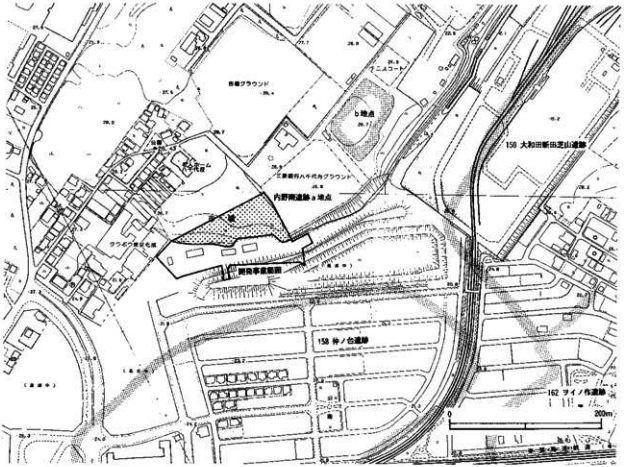
調査区内の区画については，公共座標に従って方眼杭を設置し，これを基に100m×100mの大グリッドを設定し，その中に10m×10mの中グリッドを，さらにその中に5m×5mの小グリッドを設定した。大グリッドはアルファベットと数字の組み合わせで表し，中グリッドは北西隅を1として100までの数字で，小グリッドは1～4の数字で表し，それぞれのレベルに応じてA1G，A1-34G，A1-34-1Gというように表記した（第4図)。なお，公共座標の値は，A1-67-1G杭がX座標－30,060m，Y座標22,260m，A2-65-1G杭がX座標－30,040m，Y座標22,360mである。

この区画をもとに2m×5mのトレンチを10m間隔を原則として設定し，必要に応じて位置をずらしたり，縮小・拡張を行った。350m²分を掘削し，その結果，遺構として奈良時代住居跡・縄文時代炉穴・土坑を検出した。縄文時代土坑のうち，遺構・遺物が比較的集中する地点から離れていた1P・2P・3Pについては調査を行い，その他は本調査の対象とした。

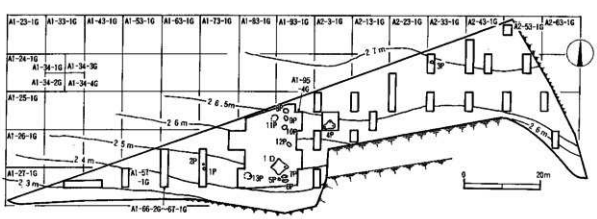
調査の経過は，3月5日機材搬入・トレンチ設定，3月9日人力による掘削，3月10・11・12日重機による掘削及び清掃検出，3月13・16・17日土層・遺構調査，である。

（2）本調査

確認調査で検出した遺構の調査を行うため，A1-85G・86G・95G・96G付近のトレンチ拡張を含めた対象範囲280m²について本調査を実施した。経過は，3月24日重機による表土掘削，3月26日～4月13日遺構調査，4月16日遺物水洗・機材撤収，である。



第３図　内野南遺跡ａ地点周辺地形図　八千代市都市計画基本図１：2500に加筆



第４図　内野南遺跡ａ地点遺構配置図

第２章　調査の結果

１　調査区の層序

（１）標高の最も高い地点

調査区北東隅のＡ2-53-1Ｇ西壁の土層である。ソフトロームまで0.8ｍの厚さがあり，表土下の黒褐色土層である３層・４層や，上下の層よりも明るく見える褐色土の５層がよく残っており，良好な土層である。この付近からは遺物は出土しなかった。

（２）遺構・遺物の集中地点

調査区ほぼ中央のＡ1-95-4Ｇ西壁の土層である。やはり良好である。（１）の５層に相当するのがここでは７層である。その直下の８層・９層に縄文時代早期・前期の遺物が主体的に含まれていた。

（３）斜面部

調査区西部のＡ1-66-2Ｇ～67-1Ｇ東壁の土層である。（１）（２）に比べるとソフトロームまでの堆積は薄い。ここの４層が（１）の５層・（２）の７層に相当するようである。５層に含まれる礫片とは，本遺跡で目立った存在となっている小礫と類似のもので，破片４点・完形１点である。ほかに頁岩のフレイクが１点出土した。土器類は無かった。

２　縄文時代の遺構

（１）炉穴

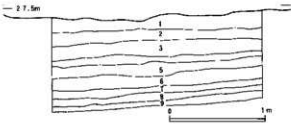
４Ｐ　Ａ2-5Ｇ～6Ｇで検出した。掘り込みのしっかりした炉穴である。赤く焼けた明瞭な火床が３か所認められた。火床１を伴う炉穴が，他２基を切っていると判断した。しかし調査当初から終盤まで基数の確定に悩むなど混乱したので，充分な土層調査等ができていない。火床１を伴う炉穴の上面は2.14ｍ×0.7ｍ，底面は1.82ｍ×0.54ｍ。火床２を伴う炉穴の上面は1.97ｍ×0.73ｍ，底面は1.65ｍ×0.51ｍ。火床３を伴う炉穴の上面は2.31ｍ×0.72ｍ，底面は1.88ｍ×0.51ｍである。深さは0.35ｍ～0.55ｍであるが，火床２・３には底面に小ピットが伴う。

遺物は３点である。火床１付近からは繊維を含まない土器片が，火床２付近からは繊維を含み擦痕のある黒色の土器片が出土したが，共に小片である。火床３からは第９図及び第17図１に示した茅山式土器が１点伏せた状態で出土した。底部から直線的に外へ開く深鉢で，口縁は小波状，底部は平底だが部分的に上げ底になる。外面の口縁付近には黒色の付着物が認められる。条痕文が内外面に施され，外面の口縁付近では横方向，胴部では斜め及び縦方向，内面は部分的であるが，口縁付近では横方向，胴部では縦方向である。色調は上半が灰褐色・暗褐色，下半の外面が橙褐色，内面が淡褐色である。胎土に繊維・砂粒を含み，非常に脆い。完形に近い状態であったと思われるが，接合・復元は困難であった。

４Ｐは，明瞭な火床とそこで使用されたであろう深鉢が出土するなど，早期の好資料となった。

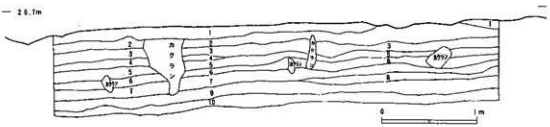
５Ｐ・６Ｐ・７Ｐ　住居跡１Ｄの南で３基隣り合って検出した。５Ｐはごく少量の焼土を伴う凹み状土坑。火床は認められなかったが炉穴の一種であろう。上面0.63ｍ×0.5ｍ，底面0.32ｍ×0.23ｍ，深さ0.19ｍ。遺物は無かった。６Ｐは焼土を伴う凹み状土坑。火床は認められなかったが炉穴の一種であろう。上面1.54ｍ×0.7ｍ，底面は２段になり，浅い方は0.36ｍ×0.28ｍ，深さ0.1ｍ。深い方は0.95ｍ×0.34ｍ，深さ0.24ｍ。遺物は無かった。７Ｐは焼土と火床を伴う土坑。炉穴である。1.3ｍ×0.76ｍ，底面 1.0ｍ×0.47ｍ，深さ0.3ｍ。遺物は無かった。

13Ｐ　Ａ1-87Ｇで検出した。焼土と火床を伴う土坑。炉穴である。プランや壁・底面がいずれも不明瞭であった。半分は確認調査時のトレンチで破壊してしまった。残存部の上面は1.17ｍ×0.66ｍ，底面は



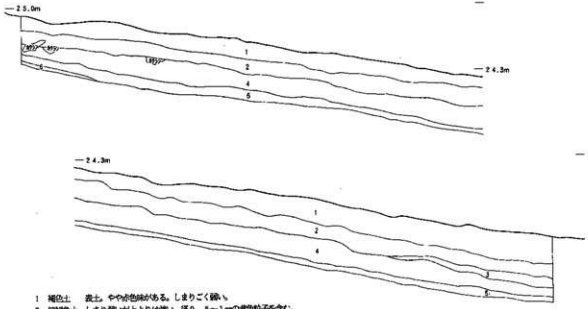
1　黒褐色土　表土。しまりごく弱い。
2　暗褐色土　しまり弱い。が上よりは強い。径0．5mmの黄色粒子をまばらに含む。
3　黒褐色土　上より暗い。上よりしまり強い。径1mmの赤色粒子をまばらに含む。
4　黒褐色土　上よりしまり強く弱い。
5　褐色土　上下より明るい。しまり強い。径5mmの黄色粒子をまばらに含む。
6　褐色土　上より暗い。しまり強い。
7　褐色土　上より明るい。しまり上より強い。
8　褐色土　しまり強い。ロームに漸移する。
9　褐色土　しまり強い。粘性強い。ソフトローム。

第5図　A2-53-1G西壁土層断面図



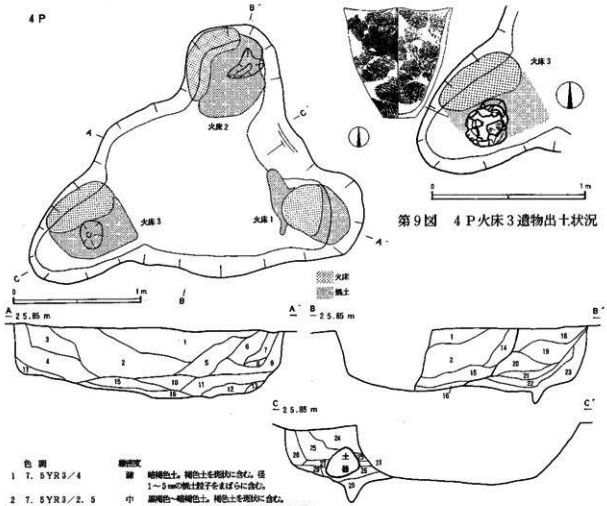
1　褐色土　表土。しまり弱い。
2　暗褐色土　しまり弱い。が上よりは強い。
3　暗褐色土　上下より暗い。上よりしまり強い。
4　暗褐色土　上より明るい。
5　暗褐色土　褐色土がにじむ。
6　暗褐色土と褐色土が混じり合う。
7　褐色土　上下より明るい。径5mmの黄色粒子をまばらに含む。
8　褐色土　上より暗い。遺物を含む。
9　褐色土　上より明るい。上よりしまり強い。ロームに漸移する。遺物を含む。
10　褐色土　ソフトローム。

第6図　A1-95-4G西壁土層断面図



1　褐色土　表土。やや赤色味がある。しまりごく弱い。
2　暗褐色土　しまり弱い。が上よりは強い。径0．5～1mmの黄色粒子を含む。
3　暗褐色土と褐色土が混じり合う。しまりは上と同様。
4　褐色土　上よりしまり強い。径5mmの黄色粒子を含む。
5　褐色土　上よりしまり強い。粘性強い。ロームに漸移する。礫片を含む。
6　褐色土　しまり強い。粘性強い。ソフトローム。

第7図　A1-66-2G～67-1G東壁土層断面図

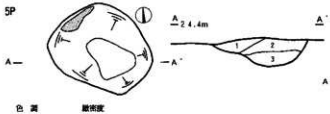


第9図　4P火床3遺物出土状況

	色調	硬軟度	
1	7．5YR3／4	軟	暗褐色土。褐色土を斑状に含む。径1～5mmの焼土粒子をまばらに含む。
2	7．5YR3／2．5	中	黒褐色～暗褐色土。褐色土を斑状に含む。径1～5mmの焼土粒子をまばらに含む。1より多い。
3	7．5YR4．5／6	中	褐色～明褐色土。部分的に7．5YR3／3の暗褐色土を含む。粘性あり。
4	7．5YR4／5	中	褐色土。粘性あり。
5	7．5YR4／4～4／5	中	褐色土。径1～3mmの焼土粒子を含む。下部に多い。
6	7．5YR3／3～3／2．5	中	暗褐色～黒褐色土。褐色土を斑状に含む。焼土粒子をごく少量含む。
7	7．5YR4／4～3／4	中	褐色～暗褐色土。6よりやわらかい。粘性あり。
8	7．5YR4／4	中	褐色土。7より硬い。しまり良く粘性あり。径1～2mmの焼土粒子を含む。
9	〃	―	褐色土。
10	7．5YR3／4～4／4	中	暗褐色～褐色土。径1～2cmの焼土ブロック、径1～5mmの焼土粒子、径5mmの黄色粒子、径2～3mmの炭化物を含む。
11	5YR4／4～4／5	軟	にぶい赤褐色～赤褐色土。部分的に5YR3／6の暗赤褐色土を含む。焼土を主とする。径1～2mmの炭化材を含む。
12	2．5YR3／6～5YR4／6	軟	暗赤褐色～赤褐色土。径2～3mmの焼土ブロックを含む。下は火床。
13	7．5YR4／4	軟	褐色土。しまり弱い。粘性強い。焼土粒子をごく少量含む。
14	7．5YR3／4と4／4	軟	暗褐色土と褐色土が斑じり合う。径1mmの焼土粒子をまばらに含む。
15	7．5YR3／4	中	暗褐色土。径2～3mmの焼土粒子を多く含む。径1～2mmの炭化物を含む。
16	7．5YR4／6	中	褐色土。ローム主体。褐色土が斑じる。径2～3mmの焼土粒子、炭化材を含む。
17	7．5YR4／6	軟	褐色土。ローム主体。
18	7．5YR4／4	中	褐色土。径2～3mmの焼土粒子をごく まばらに含む。
19	7．5YR3／3．5と4／4	中	暗褐色土と褐色土が斑じり合う。径1～2mmの焼土粒子を少量含む。
20	7．5YR4／4	軟	褐色土。下部に5YR4／4のにぶい赤褐色の焼土あり。径1cmの焼土ブロックを含む。
21	5YR4／4	軟	にぶい赤褐色土。焼土を主とする。径1cmの焼土ブロックを含む。
22	5YR4／4	軟	にぶい赤褐色土。径2～3mmの焼土粒子、径1cmの焼土ブロックを多く含む。
23	7．5YR4／6	中	褐色土。硬い。ローム主体。
24	7．5YR3．5／4	軟	暗色～褐色土。径0．5mmの焼土粒子をごく少量含む。
25	7．5YR4／3	軟	褐色土。径2～3mmの焼土粒子をごく少量含む。
26	7．5YR4／4	軟	褐色土。径5cmのロームブロックを含む。粘性あり。
27	7．5YR4／3	軟	褐色土。径1～2cmの焼土ブロックを含む。
28	5YR3／4	軟	暗赤褐色土。焼土を主とする。径2～3mmの焼土ブロックを含む。
29	7．5YR4／4	中	褐色土。径1～2mmの焼土粒子をごく まばらに含む。

第8図　4P実測図

5P

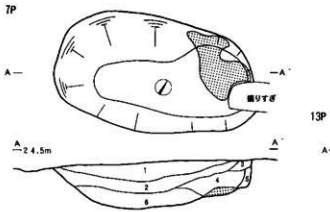


	色調	緻密度	
1	5YR4/6	緻	赤褐色土。粘土がにじむ。
2	7.5YR4/4	緻	褐色土。
3	7.5YR4/5	中	褐色土。径0.5～1mmの粘土粒子ごくまばらに含む。 径1～2mm黒色粒子まばらに含む。

6P

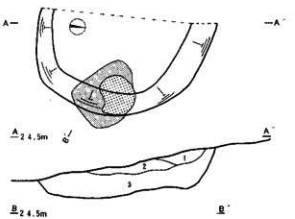
	色調	緻密度	
1	7.5YR4/4	中	褐色土。径1mmの粘土粒子を少量含む。
2	5YR4/4	中	にぶい赤褐色土。にじむような粘土。
3	7.5YR4/4	緻、中	褐色土。ローム まじり。
4	7.5YR4/5	中	褐色土。径1mmの粘土粒子を少量内む。

7P



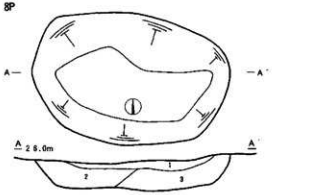
	色調	緻密度	
1	7.5YR4/4	緻～中	褐色土。径1～2mmの粘土粒子・炭化物を少量含む。
2	7.5YR4/4（上より若干明るい）	緻～中	褐色土。径2～3mmの粘土粒子を少量含む。
3	5YR4/4	緻	にぶい赤褐色土。粘土を多く含む。
4	5YR4/6	緻～中	赤褐色土。粘土。径5mmの粘土ブロック含む。下部は火床になる。
5	7.5YR4/4	緻～中	褐色土。粘土がわずかにじむ。
6	7.5YR4/4（2より若干明るい）	緻～中	褐色土。ローム まじり。

13P



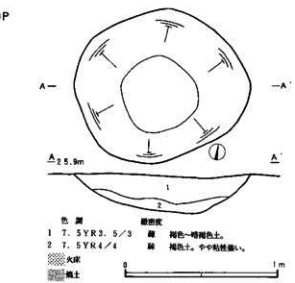
	色調	緻密度	
1	5YR4/4	緻	にぶい赤褐色土。にじむような粘土。
2	7.5YR4/4	緻	褐色土。径1mmの粘土粒子を少量含む。
3	7.5YR4/5	緻	褐色土。しまり強い。
4	7.5YR4/4	緻	褐色土。径2～3mmの粘土粒子をごくまばらに含む。
5	5YR4/5	中	にぶい赤褐色～赤褐色土。径2cmの粘土ブロックを少量含む。径2～3mmの粘土粒子を多量含む。

8P



	色調	緻密度	
1	7.5YR4/4	緻	褐色土。
2	7.5YR3/4・4/4	緻	暗褐色土と褐色土が混じり合う。
3	7.5YR4/5	中	褐色土。粘性強い。

10P



	色調	緻密度	
1	7.5YR3.5/3	緻	褐色～暗褐色土。
2	7.5YR4/4	緻	褐色土。やや粘性強い。

第10図　縄文時代遺構実測図（1）

0.9m×0.5m，深さ0.24m。遺物は無かった。

5P・6P・7Pは隣り合い，13Pは少し離れているが，ほぼ同じ標高の所に立地する。互いに関連のある遺構であろうか。4基とも遺物が無いが，縄文時代早・前期の範囲内の遺構と考えて差し支えないものであろう。

（2）遺物を伴う土坑

8P　A1-95Gで検出した。凹み状土坑。上面1.24m×0.87m，底面0.92m×0.43m，深さ0.2m。遺物は，覆土上層から縄文土器片2点（茅山式1点，三戸式1点＝口縁）・石片1点が出土した。第12図1は三戸式土器の口縁部である。8Pの南東約4.8mの地点で出土した土器片と接合した。外面は横ナデ痕が顕著で，微隆起状になっている。胎土に砂粒・長石・雲母砕片を含み，色調は外面が灰褐色・淡褐色，内面が褐色・橙褐色，焼成は良い。第12図2は砂岩質の石の破片である。

10P　A1-95Gで検出した。凹み状土坑。上面1.15m×1.0m，底面径0.5m，深さ0.24m。遺物は，覆土上層から三戸式土器片1点が出土した。第12図3がそれである。輪積みの部分で割れたらしく，擬口縁状になっている。外面の横ナデ痕や胎土，焼成は8Pの土器と同様である。色調は褐色である。

11P　A1-85Gで検出した。凹み状土坑。プランや壁・底面がいずれも不明瞭であった。約半分は明確にできなかった。残存部の上面0.96m×0.6m，底面0.79m×0.54m，深さ0.14m。遺物は，覆土上層から三戸式土器片1点，底面近くから茅山式土器片1点，石片1点が出土した。第12図5は三戸式土器片である。外面の横ナデ痕や胎土，焼成は8Pや10Pの土器と同様である。色調は外面が淡褐色，内面が橙褐色である。第12図4は，おそらく火を受けて破砕した石の破片である。11Pの東約3.9mの地点で出土した石片と接合した。

12P　A1-96Gで検出した。凹み状土坑。緩斜面に立地する。上面1.06m×0.61m，底面0.59m×0.27m，深さ0.16m。遺物は，覆土上層から中層にかけて縄文土器片5点（おそらく浮島式）が出土した。同一個体のものと思われるがいずれも小片で接合しない。

1P　A1-77Gで検出した。緩斜面に立地する。2基の凹み状土坑が交わっているような状態。セクション調査時にはこのことに気付かなかった。上面長軸1.2m，北西側の土坑の底面は0.55m×0.34m，深さ0.12m。南東側土坑の底面は0.6m×0.46m，深さ0.14mである。遺物は縄文土器片が2点で，いずれも小片。前期後半と思われる。

8P・10P・11Pは，一部茅山式土器が伴っているが，三戸式土器散布の中心部に立地しており，こちらとの関連が強いものと考えられる。12P・1Pは浮島式期であろう。

（3）遺物を伴わない土坑

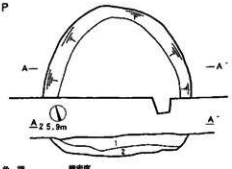
2P　A1-76Gで検出した。緩斜面に立地する。円筒状土坑。上面の直径0.29m，底面0.17m×0.11m，深さ0.2m。

3P　A2-34Gで検出した。凹み状土坑。上面0.9m×0.81m，底面0.47m×0.28m，深さ0.24m。

9P　A1-95Gで検出した。内部に段のある土坑。上面1.2m×0.9m，底面0.2m×0.11m，深さ0.36m，段の深さは0.17m。

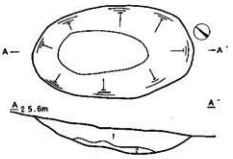
いずれも遺物の伴わない土坑であるが，2Pは1Pと，9Pは8P・10P・11Pとの関連が強いと考えられる。

11P



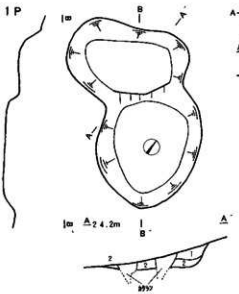
色 調	緻密度	
1 7．5YR4／3	緻	褐色土。
2 7．5YR4／4	中	褐色土。しまり強い。粘性強い。

12P



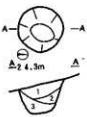
色 調	緻密度	
1 7．5YR4／4	疎～中	褐色土。径5mmの灰色粒子をごくまばらに含む。
2 7．5YR4／5	中	褐色土。上よりしまり強い。粘性強い。

1P



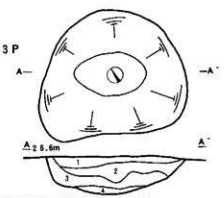
1 暗褐色土。しまり弱い。
2 褐色土。しまり弱いが、1よりは強い。ロームまじり。

2P



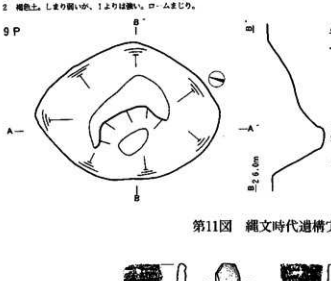
1 暗褐色土。しまり強い。径1～2mmの黄色粒子を含む。
2 褐色土。しまり強い。径0．5～1cmのロームブロックを含む。
3 褐色土。しまり強い。粘性強い。

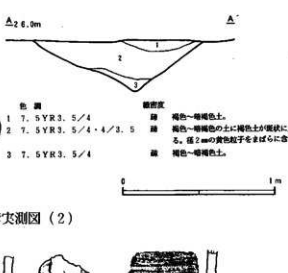
3P



1 暗褐色土を主とし、褐色土が混じる。しまり強い。
2 暗褐色と褐色土が混じりあう。しまり弱い。
3 褐色土。しまり1・2より強い。暗褐色土が少量混じる。
4 褐色土。しまり3よりも強い。粘性強い。

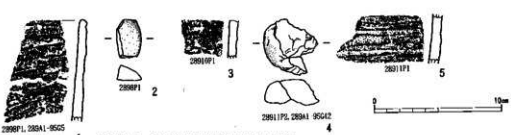
9P





色 調	緻密度	
1 7．5YR3．5／4	疎	褐色～暗褐色土。
2 7．5YR3．5／4・4／3．5	疎	褐色～暗褐色の土に褐色土が斑状に入る。径2mmの黄色粒子をまばらに含む
3 7．5YR3．5／4	疎	褐色～暗褐色土。

第11図　縄文時代遺構実測図（2）



第12図　縄文時代遺構内出土遺物

3　奈良時代の遺構

１Ｄ　A1-96Ｇ～97Ｇで検出した。竪穴住居跡である。平面形は一辺2.6m～3.0mの方形で，深さは0.56m～0.32mである。壁はほぼ垂直か少しオーバーハングする。床は平坦で硬いが，硬化面と言える程の箇所は無かった。貼り床が広範囲に認められるが，北部にはソフトロームが残された部分がある。周溝は全周し幅0.34m～0.14m，深さ0.1m～0.06mである。カマドは東コーナー部にある。焼土と火床，煙道によって存在がわかったが，粘土等袖や天井部の痕跡は全く認められなかった。柱穴は貼り床を除去して探したが，認められなかった。

覆土は上から黒褐色土，暗褐色土，褐色土が認められた。主に４層に炭化材が含まれていた。

遺物は須恵器片・土師器坏・チャートフレイクの３点である。住居に伴う遺物は，床面近くに集中する。第16図１は須恵器甕の破片で，外面に叩き目，内面には弧状の刷毛目が施される。胎土には微小な白色粒子が含まれる。ほぼ床面直上にあった。同図２は土師器坏で，16個の破片に割れて出土した。すべて接合したが，二分の一弱が不足し完形にはならない。復元口径12.0cm，底径 6.4cm，高さ4.0cm。口縁部外面直下に沈線状の調整痕が巡る。胴部外面は横～斜め方向の削り，内面は磨かれている。ロクロは使用されていない。胎土には細かい砂粒を含み，色調は暗褐色・褐色，焼成は良い。概ね８世紀後半に属するものと考えられ，本遺構を奈良時代のものと判断した。

同図３は覆土中層から出土したチャートのフレイクである。

4　遺構外出土遺物

今回の試掘から本調査に至る一連の調査で得られた遺物の総数は，遺構内の出土も含めて土器類151点，石器・礫類72点であった。遺構外で比較的遺物が集中していたのは，A1-85Ｇ～A1-95Ｇの８Ｐ～11Ｐ周辺と，A1-5Ｇの４Ｐの北側の地点である。土器類は，１Ｄ遺構の遺物以外はすべて縄文時代に属するものと判断された。石器・礫類も出土状況から考えて，縄文土器に伴うものと判断した。

（１）縄文土器

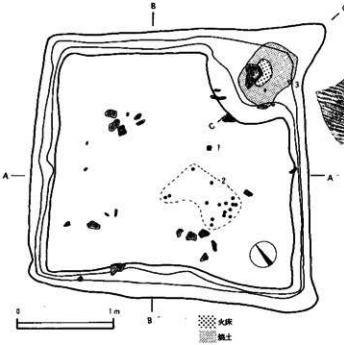
認定できた土器型式は，早期（稲荷台式・三戸式・茅山式），前期（黒浜式・浮島式），中期（加曽利Ｅ式），後期（加曽利Ｂ式）である。

稲荷台式土器（第17図２）１点のみ確認した。器面が荒れているためわかりにくいが，まばらな撚糸文が見える。淡褐色，胎土に砂粒を含む。

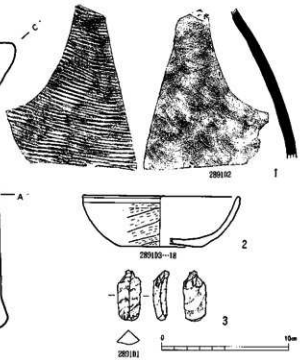
三戸式土器（同図３～５）破片数24点で，全体の約16％であった。８Ｐ～11Ｐ周辺のみに集中して出土した。８Ｐ～11Ｐで出土したものと同様，外面の横ナデ痕の顕著なタイプのみが出土している。色は淡褐色や殻褐色で，胎土に砂粒・長石・雲母を含み，焼成は良い。すべての破片が同様の特徴を持っており抽出が容易である。

茅山式土器（同図６～９）破片数28点で，全体の18％であった。A1-85Ｇ～A1-95Ｇに比較的集中していた。いずれも胎土に繊維が含まれる。６は格子目状の沈線と口唇部に刻みが認められる。橙褐色で，焼成は良い。他は内外両面に条痕文が施される。７には補修孔のような焼成後穿孔が認められる。９の外面上方には，やはり焼成後に円形に削られた部分がある。

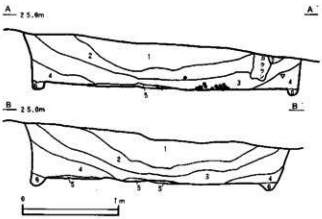
黒浜式土器（同図10～15）破片数40点で最も多く，約27％を占める。すべて胎土に繊維を含む。特にA2-5Ｇの４Ｐの北側の地点に集中して出土した。ここに後述する小礫が30個伴っていた。10・11・13・14がA2-5Ｇ出土である。10・11は共に器面が荒れていて文様がよく見えない。13には縄文の末端処理部分が荒く施文されている。13と14は接合しないが同一個体であろう。15は押し引き状の平行沈線による横位全面施文で，黒浜式の古段階に属する技法である。



第13図　１Ｄ平面図，遺物・炭化材出土状況



第16図　１Ｄ内出土遺物



	色調	層序度	
1	7．5YR3／2	線	黒褐色土。径1～2㎜の黄色粒子を含む。
2	7．5YR3／3	線	暗褐色土。径1～2㎜の黄色粒子を含む。焼土粒子ごく少量含む。
3	7．5YR4／3	線	褐色土。径5㎜以下の黄色粒子を含む。焼土粒子を2より多く含む。ザラッとした感触。
4	7．5YR4／4	線	褐色土。径2～3㎜の黄色粒子を多く含む。焼土，炭化材を多く含む。
5	7．5YR4／4	線	褐色土。床面直上の土。ロームブロックを含む。全面的には認められない。
6	7．5YR4／6	線	褐色土。周溝覆土。ロームまじり土。

第14図　１Ｄ上層断面図

	色調	
7	7．5YR3／4	しまり弱い。粘性弱い。暗褐色土。径2～3㎜の焼土粒子を多く含む。約1㎝角の炭化材をまばらに含む。径2～3㎜のロームブロックをまばらに含む。径2～3㎜の黄色粒子含む。床に接するところは火床。
8	7．5YR4／4	しまり強い。粘性あり。褐色土。径2～3㎜のロームブロックを含む。

第15図　１Ｄカマド断面図

浮島式土器（同図16～24）破片数36点で，約24％を占める。まばらに広範囲に散布していた。16は地文が粗い縄文，その上に半切竹管状工具を用いた沈線が引かれている。17は口唇に刺突，補修孔のような焼成後穿孔や波状貝殻文が認められる。18には押し引き文，19には輪積み痕，20には波状貝殻文がそれぞれ認められる。21～23には貝殻腹縁文が施される。拓本ではわかりにくいが，21の左上部には爪形の連続刺突も認められる。概ね16・17がⅠ式，18～20がⅡ式，21～23がⅢ式に属すると考えられる。

加曽利Ｅ式土器（同図25・26）２点のみ確認した。同一個体か。複節縄文と磨り消しが認められる。共に褐色，胎土に砂粒と雲母砕片が含まれる。焼成は良い。加曽利Ｅ３式と考えられる。

加曽利Ｂ式土器（同図27・28）２点のみ確認した。いずれも小片である。薄く作られ焼成は良い。27は精製土器か。ＲＬ縄文が施される。28は粗製土器であろう。粗い縄文と沈線が認められる。

（２）石器・礫

石器

叩石（第17図29）片面中央部に叩いたような痕跡がある。A1-86Gから出土した。丁度手のひらに納まるくらいの大きさで，重みがある。質量は138.７ｇ。

石皿（同図30）多孔質の石を用いた石皿の破片である。試掘時に出土したもので，A2-5G付近に当たり，黒浜式土器との関連が強い。

磨石（同図31）磨石の破片である。重みがある。遺物分布の中心からはやや離れたA2-16Gから出土した。

剥片（同図32）頁岩の剥片。片面は自然面を残している。試掘時に出土したもので，A1-86G付近に当たり，浮島式土器との関連が強いと考えられる。

礫

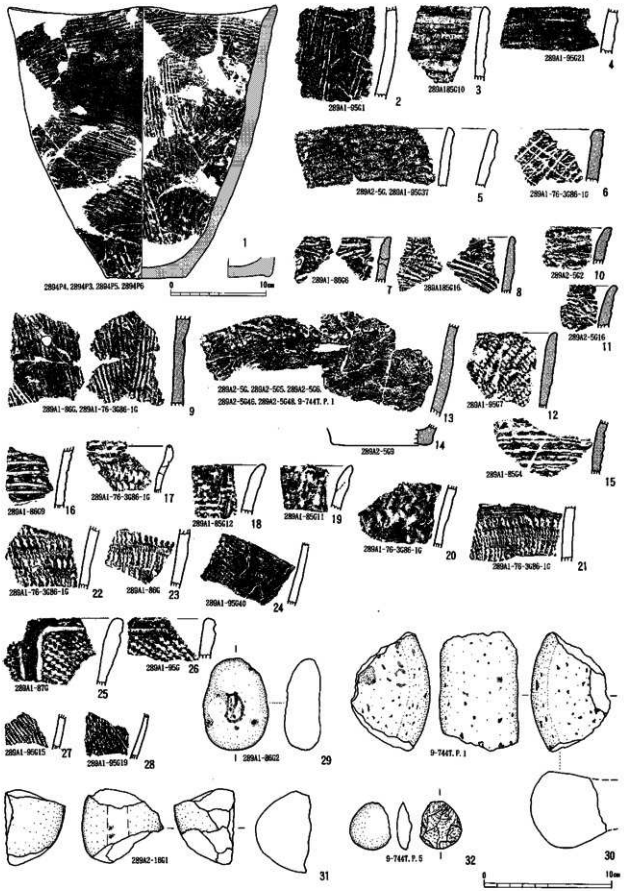
礫には一見して，大きめのものと小さめのものとがある。大礫・小礫として以下に説明する。

大礫（第18図１～９）大きいと言っても片手で持てる程度の大きさである。１・２はA1-85G出土，３・４はA1-76-3G～86-1G出土，５～８はA1-95G出土。９はA1-97G出土。５・６以外は，明らかに熱を受け部分的に赤色化している。またそのために割れたり亀裂が入っている。５～８の出土地点は三戸式土器がまとまっていた地点である。

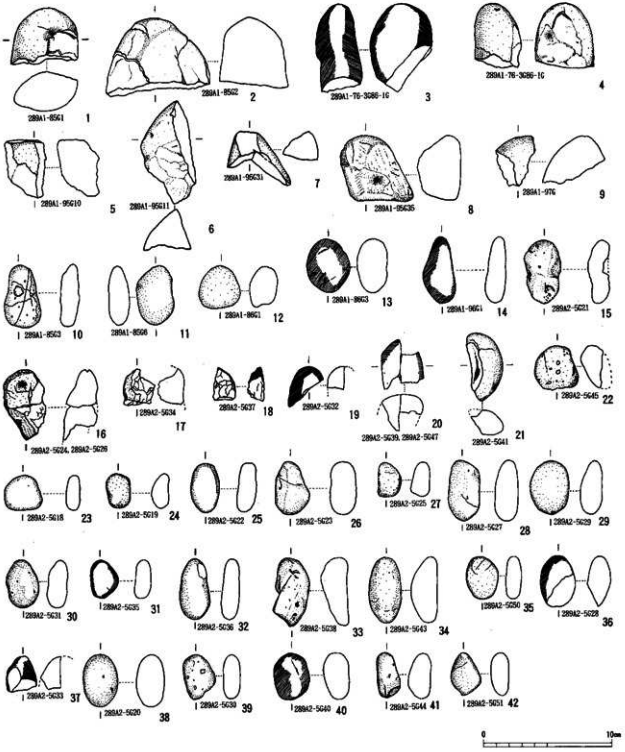
小礫（同図10～42）いずれも手のひらの中に入ってしまうような小石である。10・11はA1-85G出土。10は亀裂が入り，11は赤色化している。12・13はA1-86G出土。ともに赤色化している。14はA1-96G出土。赤色化は認められない。

15～42はすべてA2-5G出土で，黒浜式土器に伴うものである。３ｍ×4.5ｍの範囲にまとまって出土した。15～22は熱を受け割れているもの。16と17は同一個体と考えられる。熱を受けたためか脆くなっている。19と20も同一個体であろう。鋭利に割れる黄褐色の石で，石器としての使用に耐えうる材質である。23～35は赤色化など熱を受けた痕跡のあるもので，石の種類は様々である。36～42は赤色化など明瞭な熱を受けた痕跡が無いもの。しかし39・42などには亀裂が認められる。

火を受けた大小の礫が出土していることは，本遺跡の特徴の一つとして認識しておく必要があろう。但し量的にはそれほど多いとは言えず，比較的まとまって出土したA2-5Gにしても，出土状況は散漫と言わざるを得ない。


2894P4, 2894P3, 2894P5, 2894P6
1
0
10cm
289A1-8561
2
289A1B5610
3
289A1-95621
4
289A2-56, 289A1-85637
5
289A1-76-3686-1G
6
289A1-8668
7
289A1B5616
8
289A2-562
10
289A2-5616
11
289A1-86G, 289A1-76-3686-1G
9
289A2-56, 289A2-565, 289A2-566,
289A2-5646, 289A2-5648, 9-744T. P. I
13
289A1-8567
12
289A2-569
14
289A1-8564
15
289A1-8669
16
289A1-76-3686-1G
17
289A1-85612
18
289A1-85611
19
289A1-76-3686-1G
20
289A1-76-3686-1G
21
289A1-76-3686-1G
22
289A1-806
23
289A1-95640
24
289A1-876
25
289A1-856
26
289A1-86615
27
289A1-85619
28
289A1-8662
29
9-744T. P. I
30
289A2-1861
31
9-744T. P. S
32
0
10cm

第17図　出土土器・石器


289A1-8561 1
289A1-8522 2
289A1-76-3686-1G 3
289A1-76-3686-1G 4
289A1-95610 5
289A1-95611 6
289A1-95631 7
289A1-95635 8
289A1-976 9
289A1-8563 10
289A1-8566 11
289A1-8861 12
289A1-8863 13
289A1-8861 14
289A2-5621 15
289A2-5624, 289A2-5628 16
289A2-5634 17
289A2-5637 18
289A2-5632 19
289A2-5639, 289A2-5647 20
289A2-5641 21
289A2-5645 22
289A2-5618 23
289A2-5619 24
289A2-5622 25
289A2-5623 26
289A2-5625 27
289A2-5627 28
289A2-5629 29
289A2-5631 30
289A2-5635 31
289A2-5636 32
289A2-5638 33
289A2-5643 34
289A2-5650 35
289A2-5628 36
289A2-5633 37
289A2-5630 38
289A2-5639 39
289A2-5640 40
289A2-5644 41
289A2-5651 42
0
10cm

第18図　出土礫

第3章　まとめ

今回の調査によって次のような成果が得られた。

1　縄文時代早期の三戸式土器の散布とそれを伴う土坑を確認した。これらには火を受けた大小の礫が伴う。

2　縄文時代早期の条痕文土器を伴う炉穴を確認した。

3　縄文時代前期黒浜式土器とそれに伴う石皿・火を受けた小礫などの散布を確認した。

4　縄文時代前期浮島式土器とそれを伴う土坑を確認した。

5　縄文時代早・前期に属すると見られる土坑や凹み状土坑，焼土や火床を伴う土坑を確認した。

6　縄文時代中期・後期の土器片を検出した。

7　縄文時代の石器である磨石・石皿の破片，叩石を検出した。

8　奈良時代に属する住居跡1軒を検出した。周溝が全周し，コーナーにカマドがあり，柱穴が無い等の特徴を確認した。また，覆土から炭化材，土師器の坏，須恵器甕の破片を検出した。

本遺跡における縄文時代の遺構・遺物の在り方は，早期・前期を中心としているが，量的に決して多いとは言えない。おそらく，拠点となる遺跡からはやや離れた地点なのであろう。しかし，少量しかも断続的とは言え，早期から後期に至る遺物があるということ，また谷に面した南向き斜面という好条件であることを考えると，縄文時代の大部分の時期に渡って利用されていた地点である可能性が高い。痕跡は少ないものの，安定的に利用された場所として認識しておきたい。

また，前述したように，火を受けた大小の礫が出土していることは，本遺跡の縄文時代の特徴の一つとして認識しておく必要があろう。礫の用途については，まず火との関連が強いことから，ストーンボイリングが考えられよう。しかし同じように火との関連が強い遺構である4Pなどの炉穴には，これらの礫が全く伴っていない。時期差ということが主な理由であろうが，焼礫と炉穴とが絡みにくいという状況設定についても考えておく必要がありそうである。他に，小礫の用途については，原始的な織物を作るための重りという想定がある。本遺跡の小礫の質量は，概ね軽いものが10.1g～19.9g，重いものが26.8g～35.9gという2種に分けることができる。重い方であれば，重りとしての使用に耐えられるかもしれない。

花輪谷津奥部に展開する仲ノ台・ヲイノ作・ヲイノ作南・大和田新田芝山の各遺跡では，旧石器・縄文時代が主体を占めており，弥生時代以降については非常に希薄となる。再び居住の痕跡が増えてくるのは，平安時代以降9世紀から10世紀頃である。つまり奈良時代の遺構は周辺では発見されておらず，内野南遺跡a地点1D住居跡は，時間的にも空間的にも孤立しているのである。

弥生・古墳時代の遺跡が皆無ということは，花輪谷津が谷津田を作るのに適していなかったという事情があるのかもしれない。奈良時代においては既に未開の地のごとき状況になっていたこの地に，開墾の機運の高まりによって，新天地を求めてやって来た人びとがいた。その痕跡が1D住居跡ではないかと考える。しかしやはり弥生・古墳時代の集落を形成させなかったこの地の事情が作用し，定着には至らなかったのではなかろうか。

以上を内野南遺跡a地点状況として記憶に留め，今後の各種考察の参考としたい。

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちばけんやちよし うちのみなみいせきえーちてんはっくつちょうさほうこくしょ
書名	千葉県八千代市内野南遺跡a地点発掘調査報告書
編著者名	常松成人
編集機関	八千代市遺跡調査会
所在地	〒276-0045 八千代市大和田138－2 TEL.047(483)1151
発行年	西暦2000年6月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
うちのみなみ 内野南遺跡 a地点	やちよしうちのみなみ 八千代市古作字内野 1057-1・1057-2	12221	289	35度 43分 45秒	140度 4分 47秒	19980305 ～ 19980416	確認調査 350㎡ /5,300㎡ 本調査 280㎡	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
内野南遺跡 a地点	土坑群	縄文時代 早期前期	炉穴 5基 上坑 8基	縄文上器，石器，礫	
	集落跡	奈良時代	住居跡 1軒	土師器，須恵器	

(1) 航空写真　八千代市（昭和54年）

(2) 調査前風景　南西から

(3) 調査前風景　東から

(4) A1-66-2G～67-1G　東壁土層断面

(5) A1-95-4G　西壁土層断面

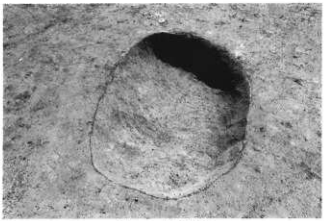
図版 2

(1) 4P遺物出土状況

(2) 4P完掘状況

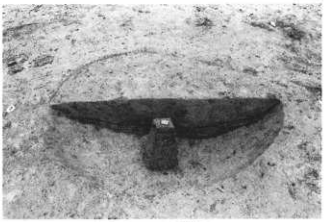
(3) 5P・6P・7P完掘状況

(4) 13P完掘状況

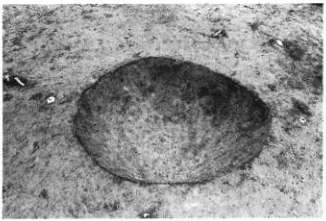


(5) 8P完掘状況

(6) 11P完掘状況

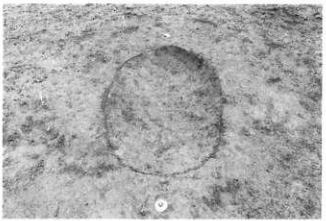


(7) 10P土層断面



(8) 10P完掘状況

(1) 1P完掘状況



(2) 12P完掘状況

(3) 2P完掘状況

(4) 3P完掘状況

(5) 9P完掘状況

(6) 8P～12P完掘状況

(7) 1D土層断面

(8) 1D調査風景

図版 4

(1) 1D遺物出土状況

(2) 1D完掘状況

(3) 1Dカマド完掘状況

(4) A2-5G遺物出土状況

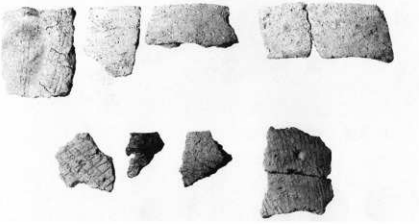
(5) 調査終了状況

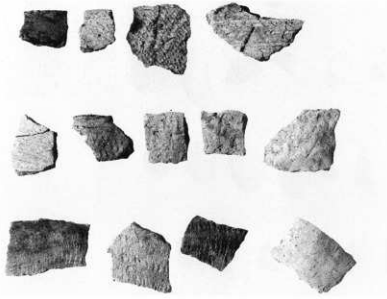
(6) 調査終了状況

(1) 縄文時代遺構内出土遺物（→第12図）

(2) 4P内出土遺物（→第17図1）

(3) 1D内出土遺物（→第16図）





(4) 遺構外出土土器（→第17図2～28）

図版 6

(1) 石器（→第17図29～32）

(2) 大礫（→第18図1～9）

(3) 小礫（→第18図10～42）

八千代市遺跡調査会組織

確認調査・本調査（平成９年度・10年度）

会　　長　村越　利光（八千代市教育委員会生涯学習部長）平成９年度
　　藤城　恒昭（　同　上　）平成10年度
副 会 長　石毛　幸治（八千代市教育委員会生涯学習部次長）平成９年度
　　三浦　幸子（　同　上　）平成10年度
委　　員　実川　憲　（八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課長）
　　小渕　修一（野村不動産株式会社地域開発第二部長）
監　　査　白石　明　（野村不動産株式会社プロジェクト事業本部部長）
事務局長　実川　憲　（八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課長）
事務局係長　小名木伸雄（八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課文化財係長）
事務局員　秋山　利光（八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課文化財係副主査）
　　常松　成人（八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課文化財係主事）
調査担当者　常松　成人（　同　上　）
調査補助員　阿部るみ子　小形　幸子　落亀　昌子　遠藤　玲子　笠川千代子
　　川島すみ子　鈴木　時子　高橋トシエ　田久保松枝　永島　辰夫
　　原田　雪子　日向　洋子　室井　恭子
整理補助員　高崎　房江　田中　洋子
事 務 員　鈴木　安子

本整理（平成11年度・平成12年度）

会　　長　藤城　恒昭（八千代市教育委員会生涯学習部長）
副 会 長　三浦　幸子（八千代市教育委員会生涯学習部次長）平成11年度
　　山本　正　（　同　上　）平成12年度
委　　員　実川　憲　（八千代市教育委員会生涯学習部生涯学習課長）平成11年度
　　鈴木　賢治（　同　上　）平成12年度
　　福田　明弘（野村不動産株式会社戸建事業部次長兼事業課長）
監　　査　白石　明　（野村不動産株式会社プロジェクト事業本部部長）
事務局長　実川　憲　（八千代市教育委員会生涯学習部生涯学習課長）平成11年度
　　鈴木　賢治（　同　上　）平成12年度
事務局係長　小名木伸雄（八千代市教育委員会生涯学習部生涯学習課文化財保護班主査）平成11年度
　　相馬　文子（　同　上　）平成12年度
事務局員　秋山　利光（同班　副主査）平成11年度
　　（同班　主任文化財主事）平成12年度
　　宮澤　久史（同班　主任主事）平成11年度
　　（同班　主任文化財主事）平成12年度
整理担当者　常松　成人（同班　主任主事）平成11年度
　　（同班　主任文化財主事）平成12年度
整理補助員　植田　正子　長田　京子　原田　雪子　日向　洋子　見神　光恵
事 務 員　鈴木　安子　高橋　昌代

千葉県八千代市

内野南遺跡a地点発掘調査報告書

印刷日	2000（平成12）年6月30日
発行日	2000（平成12）年6月30日
編　集	八千代市遺跡調査会 〒276-0045 八千代市大和田138-2 ☎047（483）1151
発　行	野村不動産株式会社
印　刷	株式会社　山下印刷